

株式会社さくら都市総合研究所

主席
研究員

清水 秀幸

17 都市の景観を
考える

もちろん行政の果たす役割は大きい。しかし、それ以上に大切なことは、本章の冒頭で述べたように、そこに暮らす人々が、地域の観光・文化資源を再認識し、その活用や工夫を通じ、心豊かなまちの再生に結びつけることができるか、が鍵を握るものと考えてるのである。

それでは、人に感動を与え、心豊かなまちを再生するにはどうしたら良いのだろうか。その一つの手法に「まちの求心力」を中心軸とするまちづくりがある。

求心力とは、そのまちが所有する絶対的

つ圧倒的存在感というシンボルである。

それを取り込んだランドスケープの描写が可能か否かがそれを再生する鍵となるのである。

長野市の場合、それに当たるものは、とりもなおさず「善光寺」ということになる。

幸いにして、悠久の人々は、その社殿を善光寺平の高台に据え、約1・8 kmに及ぶ緩やかな上り傾斜を生かし、一直線に社殿につながる参道を今に伝承してくれている。

この参道は、絶対秘仏たる本尊の礼拝を目指す人々に、絶妙の傾斜角をもって招き寄せ

筆者も全国各地の門前町を訪ね歩いているが、これほどの伝承整備された空間構成は、他の追従を許さないものがあると確信している。

(続く)

清水 秀幸氏(しみず・ひでゆき) 1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか6委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長



善光寺に向かう表参道修景